

「の」による名詞化構文の認知言語学的考察

堀江 薫

東北大学大学院国際文化研究科異文化間教育論講座

980-77 仙台市青葉区川内

e-mail: khorie@intcul.tohoku.ac.jp

**Abstract:** This paper attempts a semantic and cognitive characterization of syntactic constructions involving nominalizer *no*('の') in Modern Japanese, as contrasted with other competing nominalization strategies, in view of the notions of Grammaticalization, Markedness and Cognitive Complexity.

1. はじめに

日本語の助詞「の」は、節を名詞に転換する「名詞化辞」としての機能を持ち、多様な構文で使用される。現在まで、名詞化辞「の」の生起する個々の構文の統語的・意味的特徴を解明しようとする各論的研究は生産的に行われてきた(Kuno 1973, レー・バン・クー 1988, Kuroda 1992, 他多数)。その反面、名詞化辞としての「の」の生起する様々な構文に共通する特徴を明らかにしようという方向性を持った研究はそれほど多く見られなかった(Tsubomoto 1981, 国広1992, Horie 1993ab, 1994, 佐治1993, 成田1994などを除く)。

本論文では、まず「の」による名詞化構文を概観し、現代日本語において、それらの構文が、他の名詞化構文とどのような競合関係にあるかを考察する。最後に「の」による名詞化構文に共通する意味的・認知的な特徴は何か、また「の」による名詞化構文が他の名詞化構文と比較して広範囲で使用されるのは何故かという問題を、「文法化」、「有標性」および「認知的複雑さ」という概念を用いて考察する。

2. 「の」による名詞化構文と他の名詞化構文の競合関係

名詞化辞「の」が関与している構文には下記のようなものがある。

- (a) 補文: [あの人が今日来る]のを知ってた?
- (b) 主要部内在型関係節: [くりが落ちている]のを拾って食べた。
- (c) 分裂文: [私が生まれた]のは、満州です。
- (d) 「ので」・「のに」節: [あの人が誘った]ので／のに、太郎は来なかった。
- (e) 「のだ」文: 地面がぬれている。[雨が降った]のだ。

現代日本語において、文を名詞節に変換する際に用いられる名詞化辞には、「の」の他に、国語学で形式名詞とよばれる「こと」・「ところ」の2つがある。以下にそれぞれの補文化辞としての用例を示す。

- (1) [山田が泣いていた]ことを思い出した。  
 (2) [あの男が入っていく]ところを目撃した。

この他に助詞に述語の連体形が直接接続するという「直接名詞化」(‘direct nominalization’; Martin 1975の用語)が行われることもある。

- (3) [雨が降っていた] (Ø) にもかかわらず、たくさんの人が集まった。

この名詞化は、「の」や「こと」のような明示的な名詞化のマーカーを欠いているところから、本論文では「ゼロ名詞化」と呼び、関与する名詞化辞を「ゼロ」と呼ぶことにする。例文では、ゼロ名詞化辞を、上記(3)のように「Ø」で示す。

ここで注目すべきことは、「の」以外の名詞化辞は、いずれも、「の」とは生起する環境を共有し競合関係にあるが、お互い同士(例えば「こと」と「ゼロ」)は相補分布をなし、競合関係にないということである。

- (1') [山田が泣いていた]こと／の を思い出した。(「ところ」・「ゼロ」不可)  
 (2') [あの男が入っていく]ところ／の を目撃した。(「こと」・「ゼロ」不可)  
 (3') [雨が降っていた] (Ø)／の にもかかわらず... (「こと」・「ところ」不可)

### 3. 「の」による名詞化構文の意味的・認知的特徴

前節で述べたような名詞化辞「の」の広範囲にわたる分布は、「の」それ自体の固有の性質と切り離せないものと考えられる。では、その固有の性質とは何であろうか。以下では、他の名詞化辞「こと」・「ところ」・「ゼロ」との比較で、「の」による名詞化構文の意味的・認知的な特徴を明らかにしていくことにする。まず、前節の(1')ー(3')の例文をもう一度検討してみよう。

まず最初に(1')と(2')における「こと」と「ところ」の使用条件を検討する。名詞化辞「こと」と「ところ」に共通しているのは、両者とも、それぞれに『事実・命題』、『場所』という語彙的な意味を有する普通名詞が、通時的に、『名詞化』という文法的な機能(あるいは意味)を担うようになった、すなわち「文法化」(‘grammaticalization’; cf. Hopper and Traugott 1993; 国語学でいう「形式化」に近い用語)した形式だということである。しかし「こと」と「ところ」は、現代日本語において完全に語彙的な意味を喪失したわけではなく、非常に抽象度の高い意味ではあるが、依然として語彙的な意味を保持している。この、残存している語彙的な意味は、「こと」と「ところ」の名詞化辞としての機能に一定の制約を与えていると考えられる。

(1')において「こと」が容認可能なのは、「こと」がもつ『事実』という語彙的な意味が、「思い出す」という述語の意味と整合するものだからである。一方(2')において「ところ」が容認可能なのは、「ところ」がもつ、『時空間・状況』といった語彙的な意味が、「目撃する」という述語の意味と整合するものだからである。(1')における「ところ」および(2')における「こと」の使用が容認不可能であるのは、主節の述語との意味的な整合性に欠けているため

ある。紙幅の関係で詳述できないが、「こと」および「ところ」は、補文以外にも、前節であげた「主要部内在型関係節」（「ところ」のみ）、「分裂文」といった構文でも使用されることがあるが、その場合も、あくまで主節の述語との間に意味的な整合性が成立することが不可欠な条件である。

では、「こと」と「ところ」という語彙項目から文法化した名詞化辞と比べて、「の」はどのような意味的特徴をもっているのだろうか。重要なことは、「の」という名詞化辞自体が、固有の語彙的意味を持たず、名詞化する節に対して『名詞化』という文法的な意味（または機能）のみを担っているということだと思われる。この、語彙的意味の欠如という「の」の（負の）意味的特性は、「こと」や「ところ」といった語彙的意味を有する名詞化辞に比べて、共起する述語との選択制限がより少ない、ということを保証するものである。「対立する言語的単位において複雑で一般的でない特徴をもつ方が有標、単純で一般的な特徴をもつ方が無標となる」（大塚・中島1987, p.692）という言語学の「有標性(markedness)」の概念を用いると、「の」は、「こと」や「ところ」と比べて、音節数の少なさという形態の面からも、また語彙的意味の欠如という意味の面からも、「無標の(unmarked)」項であるといえる。

では、前節の例文(3')で競合していた「ゼロ」名詞化辞と「の」に関しては、有標性の観点からどのようなことがいえるだろうか。「有標性」の観点からすると、「ゼロ」名詞化辞は、無標のように一見思われる。何故なら、「ゼロ」名詞化辞は、「の」と同じく、「名詞化」という文法的な意味（または機能）以外に何らの語彙的な意味を担わないばかりでなく、「の」と異なり、明示的な言語形式として存在しないからである。しかしながら、実際には「ゼロ」名詞化辞は決してその使用範囲において「の」を凌駕することではなく、現代日本語における名詞化の手段としては決して無標とはいえないのである。

このことは、「有標性」を決定する際に、単に形態上の複雑さのみを基準にしては決められないということを示している。具体的には、Battistellaが主張するように、「（言語形式の実際の）分布('distribution')」や「生起の自由さ('freedom of occurrence')」という概念が、個別言語における有標性を決定する際に重要な役割を果たしているようである("Distribution within a language plays an important role in the determination of language-particular markedness values. Unmarked terms are distinguished from their marked counterparts by having a greater freedom of occurrence and a greater ability to combine with other linguistic elements; Battistella 1990, p.27)。分布および生起の自由さに関していうと、現代日本語において、「ゼロ」名詞化辞は、限られた数のイディオムの表現や少数の助動詞・接続助詞の前を除いては、殆ど用いられない。したがって、分布および生起の自由さを基準にすると、「ゼロ」が有標、「の」が無標ということになる。このことによって、有標性の決定において、「形態上の複雑さ」と「生起の自由さ」の両方の基準が競合した場合、後者が前者よりも優先される、ということがわかる。

ここまでの議論で、有標性の観点からみた場合、「の」は、競合する「こと」・「ところ」・「ゼロ」という3つの名詞化辞と比べた場合、無標な名詞化の手段だということがわかった。では、ある言語形式が、他の形式に比べて無標であるということは、認知的にどのようなことを意味するのであろうか。この点に関しては、「有標の範疇は、無標の範疇に比べて注意・心理的労力・処理時間の点で、認知的により複雑である傾向がある("The marked category tends to be cognitively more complex - in terms of attention, mental effort or processing time - than the unmarked

one.")」というGivónの「認知的複雑さ(Cognitive complexity)」の概念(Givón 1990, p.947)が有用であると思われる。「こと」と「ところ」に関していえば、残存している語彙的な意味が「の」に比べてより多くの「注意・心理的労力・処理時間」を要求するのであり、「ゼロ」に関していえば、生起頻度の低さが、「の」に比べて、同定する上でより多くの「注意・心理的労力・処理時間」を要求するのであろう。この認知的複雑さの低さこそが、「の」の使用上の制限の低さにつながり、他の名詞化辞よりも広範囲な環境での生起・使用を可能たらしめていると考えられる。

#### 4. おわりに

本論文では、現代日本語の名詞化辞「の」が、「名詞化」という文法的な意味のみを担っており、競合する「こと」・「ところ」・「ゼロ」の3つの名詞化辞に比べて形態または生起の自由さという観点からみて無標であるため、認知的複雑さの度合いが低く、そのことが広範囲な環境における「の」の使用を可能にしていることを論じてきた。今後、古代日本語・韓国語との対照で、上記の主張をさらに一般性の高いものにするのを課題としている。

謝辞 本研究は平成7年度伊藤謝恩育英財団日本研究助成および文部省科学研究費補助金重点領域研究(2)(No. 06232211)による研究成果の一部である。

#### 参考文献

- Battistella, Edwin L. 1990. *Markedness*. New York: State University of New York Press.
- Givón, Talmy. 1990. *Syntax II*. Amsterdam: John Benjamins.
- Hopper, Paul. and Elizabeth Traugott. 1993. *Grammaticalization*. Cambridge UP.
- Horie, Kaoru. 1993a. From zero to overt nominalizer *no*: a syntactic change in Japanese. *Japanese/Korean linguistics 3*. ed. by Soonja Choi. Stanford: CSLI. 305-21.
- \_\_\_\_\_. 1993b. *A cross-linguistic study of perception/cognition verb complements: a cognitive perspective*. Doctoral dissertation, University of Southern California.
- 国広哲弥. 1992. 「のだ」から「のに」・「ので」へ. カッケンブッシュ寛子他編. 日本語研究と日本語教育. 名古屋: 名古屋大学出版会. 17-34.
- Kuno, Susumu. 1973. *The structure of the Japanese language*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Kuroda, S.-Y. 1992. *Japanese syntax and semantics*. Dordrecht: Kluwer.
- Martin, Samuel E. 1975. *A reference grammar of Japanese*. New Haven: Yale UP.
- 成田一. 1994. 連体修飾節の構造特性と言語処理. 田窪行則編. 日本語の名詞修飾表現. 東京: くろしお出版. 67-126.
- 大塚高信・中島文雄. 1987. 新英語学辞典. 東京: 研究社.
- 佐治圭三. 1993. 「の」の本質. 日本語学. 10月号. 4-14.
- Tsubomoto, Atsuro. 1981. It's all *no*. *CLS* 17. 393-403.
- レー. バン. クー. 1988. 「の」による埋め込みの構造と表現の機能. 東京: くろしお出版.